

シリーズ 博物館めぐり(2)

田川市石炭資料館  
Tagawa City Coal-mining Museum

吉田 英生(京都大学)  
Hideo YOSHIDA (Kyoto University)

1. 石炭とともに歩んだ筑豊の田川市

五木寛之氏の『青春の門 第一部 筑豊篇』の冒頭は、主人公の伊吹信介が生まれ育った田川と香春(かわら)岳の記述から始まる。

香春岳は異様な山である。けっして高い山ではないが、そのあたえる印象が異様なのだ。

福岡市から国道二百一号線を車で走り、八木山峠をこえて飯塚市をぬけ、さらに烏尾峠とよばれる峠道をくだりにかかる時、不意に奇怪な山の姿が左手にぬつとあらわれる。

標高にくらべて、実際よりはるかに巨大な感じをうけるのは、平野部からいきなり急角度でそびえたっているからだ。

南寄りのもっとも高い峰から一の岳、二の岳、三の岳とつづく。

一の岳は、その中腹から上が、みにくく切りとられて、牡蠣色の地肌が残酷な感じで露出している。山麓のセメント工場が、原石をとるために数十年にわたって頂上から休まずに削りつづけた結果である。

かつて筑豊炭田の中心であった田川市。五木氏の文章と同様に 福岡から国道 201 号線で行くと、北東に香春岳を望みながら、中元寺川を越えて南東側に 2 km 程度行ったところに、煉瓦色の田川市石炭資料館(図 1・図 2)がある。背後には「あんまり煙突が高いので」と炭坑節に謡われた三井田川鉱業所伊田坑の巨大な二本煙突(図 3)がそびえ立っている。この煙突は明治 41 年(1908 年)、蒸気動力の排煙用として建設されたものである。蒸気動力に代わる電力の台頭で、完成後ほどなく用途変更の憂き目にあうことになるが、高さ約 45m、下部の直径 5.6 m の二本煙突は今でも威容を誇っている。一方、近くの小高い丘には、炭鉱殉職者慰霊碑や韓国人徴用犠牲者慰霊碑があり、日本の近代産業化を牽引した石炭の光と影を想起させる。

時代を遡ると、田川市で石炭が発見されたのは、天正 15 年(1587 年)、村上義信(香春城の落人)が伊田の石場で黒い石をかまどにしたところ燃え始めたときと伝えられている。採炭は江戸時代の中期から始まったが、嘉永 6 年(1853 年)の黒船来航以



図 1 香春岳と田川市石炭資料館(西側面)



図 2 田川市石炭資料館(北正面)



図 3 二本煙突と復元された炭鉱住宅

来, 蒸気動力のエネルギー源として本格的な石炭利用が始まった[1]。

明治 22 年(1889 年)に田川採炭会社(後に田川採炭鉱を経て田川採炭組と改名)が進出し, 田川市域の炭坑に初めて中央の資本が加わった。さらに, 明治 33 年(1900 年), 三井鉱山が田川採炭組を買収して, 三井田川炭鉱を創立, 大正 7 年(1918 年)に三井田川鉱業所として, 筑豊随一の大炭鉱に発展した。しかし, いわゆるエネルギー革命のために炭鉱は構造不況業種となり, 東京オリンピックが開催された昭和 39 年(1964 年)に閉山となり, その業務を引き継いだ第二会社田川鉱業所新田川炭鉱も昭和 44 年(1969 年)に閉山した[1]。市の人口は昭和 33 年(1958 年)に 10 万人を越えて最多となったが, 現在では約半分の 5 万人余りとなっている。(http://www.joho.tagawa.fukuoka.jp/toukei/03/pdf/02-01.pdf)

## 2. 資料館の社会性と展示内容

田川市石炭資料館は, 新シリーズ“博物館めぐり”の一つとして取り上げるには不適切だったかもしれない。石炭は化石燃料の代表の一つであるとの認識から, エネルギーと伝熱との関連で書き始めたものの, 上記のような思いにかられて何度もためらった。筆者は博物館シリーズの発案者として, 本来は科学的・工学的な立場から回を重ねることを希望していたが, 今回自ら取り上げた資料館について調査を進めるうちに, わが国の近代史の重要な一部としての社会的側面が前面に出てきてしまって, 思い悩んだのである。しかし, おりしも新潟県中越地震や数々の台風水害で, 不可抗力ともいえる圧倒的な力(こちらは自然であるが)に人々が翻弄されている社会の現実を思うと, 社会的な側面の強い炭鉱・炭坑に関して, 伝熱誌を通して, 特に若い人たちに紹介しておくことも意義あるのではないかと思いなおした。

資料館には, 新生代古第三紀(約 6000 万 ~ 2500 万年前)の植物の想像図に始まり, 石炭の工業的側面, 炭鉱の歴史, 炭鉱模型(図 4), 炭鉱断面図(図 5), 炭鉱で使われた機械, 炭坑労働の情景などが展示されている[2]。それらの中でも, とりわけ印象深いのは, 明治・大正・昭和期の炭坑を数多くの絵で記録した山本作兵衛氏の作品群[3]であり, またそれらの一部を実物大で表現した図 6・図 7



図 4 三井田川鉱業所伊田坑模型 (縮尺 1 : 150)



図 5 炭鉱断面図



図 6 手掘採炭のジオラマ (左側部)



図 7 手掘採炭のジオラマ (右側部)



図8 人車

のようなジオラマである。加えて当時の映像も繰り返し上映されており、炭鉱の状況が鮮明に理解できると同時に胸を打つ。また、資料館の外側には、当時の炭鉱住宅(図3)や運搬用の機関車・人車(図8)などが展示されている。

### 3. その後の調査：貴重な永末十四雄氏の書

資料館から戻ってから調査を続けた。インターネットでは、田川市だけでなく、大牟田市、夕張市、釧路市なども炭鉱に関する有益な情報を与えてくれる。個人のサイトであるが、Yui Muraai という方の <http://www6.airnet.ne.jp/~mura/index.html> は極めて充実しているので一見の価値がある。

多くの炭鉱に関する資料・データの中でも、とりわけ貴重な1冊の書に出会うことができたのでご紹介したい。元 田川市立図書館長の永末十四雄氏による『筑豊 石炭の地域史』(NHK ブックス 1973)[4]である。永末氏はこの書のいたるところで、以下のように筋肉質な言葉で筑豊の本質に迫る。

筑豊においてわが国の国産エネルギーの発展と衰退の過程が象徴されるといっても差し支えあるまい。明治維新後わが国が近代国家として自立するため筑豊は慌しく開発され、戦後は高度経済成長を促進するため速やかに崩壊させられた。近代国家として発足して以来、わが国の忙わしげな足取りが筑豊ほどダイレクトに投影された地域はないように思われる。今日の悲運は安易拙速な開発にともなう非合理的な生産構造と労働力の過度の依存による資源の濫掘に帰せられているが、それも常に先進国と競合するために背伸びし続けてきたわが国の後進性と貧しさの極端な反映に他ならない。

石炭鉱業の合理化以後、筑豊は予測を超える情況の展開に翻弄され、塗炭の苦しみをなめながら先例をみない地域社会の構造的変革を経過してきた。かつて誰が今日の情況を予見することができたであろうか、すべ

て予想される最悪状態以上のことが現実化され、住民はそれに堪えることにならされてきたのである。〈エネルギー革命〉は一般には時代の経済的動向の修辭にすぎぬものとして記憶されるかもしれないが、筑豊の住民は〈革命〉の言葉の意味するもの、その苛烈さ、酷薄さ、重たさを痛切に思いしらされてきた。

### 4. むすび

筆者自身が子供時代のずっと昔のことなので、若い読者はおそらくご存知ないであろう。炭鉱では、炭じん爆発事故がときどき発生し、多数の犠牲者を出してきた。昭和38年(1963年)11月9日には三井三池炭鉱三川坑で死者458人という最悪の事故が起こった[5]。事故を告げる、真っ黒かつ非常に大きな字で印刷された新聞記事を見るのは、子供心ながら怖かった。

わが国では大部分の炭鉱は昭和40年代に消え、国内唯一残った釧路の太平洋炭鉱も、平成14年(2002年)1月30日閉山するに至った。かつては多数あった硬(ボタ)山も、現在では崩されて消えていると聞く。石炭エネルギーについては今後も新たな展開が期待されるが、わが国の資源という点では、石炭産業はその役割を終えたといえよう。

今日、われわれはエネルギー問題を論じるとき“石炭・石油・天然ガス...”と、いとも簡単に語句を並べてしまうが、その個々の資源を獲得するために、また人々が日々生きていくために、どれだけの労苦を重ねてきたかということは、忘れてはならないことだと思う。田川市石炭資料館は、そのことを痛切なまでに教えてくれる。

最後に、本学会には九州や北海道など石炭産地の方々が多くおられるのに、地元出身でもない筆者がこのような題材を取り上げたことは僭越であるうし、内容の深みにも欠けるであろうとも危惧している。お許しを請う次第である。

### 参考文献

- [1] 田川市石炭資料館編、炭鉱(ヤマ)の文化、(1998)。
- [2] 田川市石炭資料館パンフレット、(2002)。
- [3] 山本作兵衛、筑豊炭坑絵物語、葦書房(1998)。
- [4] 永末十四雄、筑豊 石炭の地域史、NHK ブックス 199、日本放送出版協会(1973)。
- [5] 森弘太、原田正純、三池炭鉱 1963年炭じん爆発を追う、NHK出版(1999)。